

ウマ娘雑筆

三途リバー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

pixivにも投げてるウマ娘の雑筆です。

小説だったり台本形式だったり、ノリと勢いが全てですので頭ツインターボにして読んでください

ナリタブライアンはどこ……

??????°

目次

操舵士に捧ぐ勝利

1

王の器

5

トレーナー「うまぴよいしてえ……」 ナイスネイチャ「?!?!」

9

操舵士に捧ぐ勝利

風が吹き抜ける。雲ひとつない晴天の元、青々と光る芝が陽光に照らされて輝く。

出来すぎだ。決戦の舞台におあつらえ向きの、絶好の良バ馬だ。

「眠……途中で止まっちゃまったらアイツに背負ってもらってゴールすっかな……」

そんな舞台に、場違いとすら思える呑気な声が響く。それに苦笑する者、白い目を向ける者、周りのウマ娘達の反応は様々だが、当の本人は気にすることも無くひたすらに空を見上げている。

ゴールドシップ
黄金の不沈艦。

その異名が現すのはデビュー以来不敗、無敵という単純にして至極の才。並み居る強豪をなぎ倒し、火花を散らすライバル対決に割り込んで主役をかつさらい、皇帝にさえ泥を付け、そして今URR A決勝の大舞台に立つ最強のウマ娘。

そんな彼女が、心ここにあらずと言った顔でぼんやりと視線を漂わせる。観客の中には真面目にやれだの、しっかりしろだの叱咤とも罵声とも付かぬ声が投げ掛けられるがそれすら耳に入っているか怪しい。絶対王者に似ても似つかぬ体たらくである。

「あああ~~~~~ノらね……一晩目のカレーくらいノらね……」

出走も近付いているというのに、尚もそのボヤキは止まらない。虚ろな目は空の青さを写すばかりでゲートの方を見向きすらしない。

「あんでかな……なーんかやる気出ねえんだよなあ……大舞台ってのは分かってんだけどよお」

走るの好きだ。勝つのも好きだ。それは間違いないし、譲れない。だというのに今自分の心は滾らない。

どこか客観的にそれを見つめるゴールドシップだったが、考えども考えども解決策もどうしたいすらも浮かばない。溜息を一つくれてなんとなく周囲を見渡したその時、それが目に入った。

「あん？トレーナー？」

見るからに絶不調な愛バを目にしても、呆れも怒りもせずには笑って手を叩く呑気野郎が周囲の観客や学園関係者に怒鳴られている姿。ペコペコと頭を下げて、それでもその顔から笑みは剥がれない。そのうちこちらの視線に気付いたバ鹿が、一瞬だけ目を見開いてまた笑った。そして、口を開いてナニか言っている。

「……………ふひっ。ふひひひっ」

うわあ、というドン引きの声は隣の枠のウマ娘のものだろうか。しかしそんなもの、ゴールドシップにはどうでも良い。

ふひひひひ、と年頃の乙女が出て良い声ではない笑いを漏らし、ゴールドシップはようやくと前を向く。

その目はもう虚ろなどではない。焰を灯し、真っ赤に燃える様はまさにレッドストライプ。

「ふっ……………そうだ。それだよ、ゴールドシップ。私はその君を倒したくてここに来たんだ」

宿敵の声も耳に入りはしない。もう勝ち以外何も見えない。

そうだ、勝つのだ。勝つてあのバ鹿を蹴り倒すのだ。

「出走じゃああああい!!!」

不沈艦の砲声がターフに轟く。

第一回URAFファイナルズ決勝、開幕。

言葉も通じない気まぐれな才能の化身が嵐のようにターフを駆け抜けて全てを薙ぎ倒していく……どこぞの雑誌がそう評したように、ゴールドシップは理解不能な怪物扱いされてきた。才能だけで勝ち上がった天才。

トレーナーはただのお飾り、トウインクルシリーズ出場のための据え置き装置とは誰の言葉だったか。

ぶつちやけ最初はそう考えていた節もあるし、実際暇そうな奴をとつ捕まえて無理やりトレーナー契約をしたのだが、何時からかゴールドシップはそんな有象無象の声に苛立ちを覚えずに居られなくなった。

そんな声を聞く度無性に腹が立ち、面と向かって『幽霊トレーナーしかついてないあんたには負けない』なんて言われた時には相手の胸倉を掴むほどムカついた。……流石にゲンコツを落とされたので菓子折り（ゴルシちゃん特製カラシマスタード人参パイ）を持って謝りにいったが。

ともかく、ゴールドシップが才能を、そして結果を示せば示すほどトレーナー不要論は勢いを増していったのだ。

（ふざけんな）

曰く、才能だけを武器に全てを追い抜く天性の末脚。

（誰の作戦だと思ってる）

曰く、他の追隨を許さぬ爆発力。

（誰の組んだメニューで鍛えたと思ってる）

曰く、走る為に生まれてきた天才。

（誰がここまで、アタシの舵を取ったと思ってる——!!）

『トレーニングの成果見せてこい、ゴルシ』

王の器

『絶対』のないレースにおける『絶対』。

彼女達は紛うことなき王者だった。

唯一無二、無敗の皇帝、シンボリルドルフ。

不死鳥の如く蘇った新たな帝王、トウカイテイオー。

彼女達と距離が被るウマ娘は不幸、端から2着狙いで走るが吉とまで言われた。それ程までの圧倒的な実力差、才能差。

帝に、王に、誰もが適うはずも無いと謳われた時、そこにN0を突き付けたウマ娘がいた。

「ムムムツ！確かに彼女達は優駿！強敵！最強の壁!!しかしそれを崩せずして、越えられずして、そしてそれを皆に示せずして!!なにが学級委員長か!!!」

蛮勇と嗔う者もいた。

現実を見ると罵倒する者もいた。

自分の適正を、いい加減理解しろと激昂する者もいた。

しかしそれでも、そのウマ娘はターフに立った。

「皇帝！そして帝王！いずれも実力に裏打ちされた厳かなる二つ名：！しかし皆さん忘れてはいませんか？ここにいま一人、王の名を冠す学級委員長がいることを!!」

その名は、サクラバクシンオー。

「委員長さぎ…どうしてそんな元気で居られるの？」

「むっ。」

有馬記念を翌日に控えた日の昼、いつも通り健啖を披露する友人を前にそのウマ娘は口を開いた。

目の前にはこんもりと盛られた生姜焼き定食をかきこむ明日の出走者…いや、犠牲者。なんの気負いも感じさせることなく、バクシン

バクシンといつも通りの騒々しさを発揮している。

「ふむ…そうですね、何故私が常に明るく、皆さんを照らす太陽の如き存在かと言われると我が身魂から生い立ち、そしてその道程で学んだ数多のことを一から説明せねば……」

「そうじゃなくって…明日、会長達と有馬で走るんでしょ。委員長の実力を疑ってる訳じゃないけどさ…あの人は別格とかそういうレベルじゃない。次元が違うよ。そもそも委員長、長距離向いてないし…皆面白がってるけど、こんなの公開処刑じゃん！」

激した彼女だが、その心の底にあったのは、なにもサクラバクシンオーに対する侮蔑などではない。むしろその反対だ。

ちよつと（と言うか大分）抜けているところはあがあるが、天真爛漫な明るさで皆を引つ張り、ちよつとやそつとではへこたれない我らが学級委員長は間違いなく愛されている。レースという厳しい世界で生きる中で、皆にとって彼女の明るさはかけがえのないものにすらなっていた。

だがそれにしても、そんなサクラバクシンオーの人気をもつてしても今度の有馬記念は自殺行為としか言いようがなかった。

そもそも距離が距離である。確かにバクシンオーはデビュー以来短距離で無敗を誇り、現役最強スプリンターと謳われているが有馬記念は長距離のレース。そこに距離適性抜群の、それこそ無敗のシンボリルドルフが参戦してくるのだ。さらに次代の皇帝などと噂されるトウカイテイオーまで。

無謀である。

「……これは私のトレーナー受け売り…というより、この言葉を聞いた私が3年間を走り切った上での所感ですが」

びり、と空気が震えた。この席だけではない。食堂のあちこちで食事をとっていた生徒が、皆一様に耳と尻尾を跳ね上げている。

ざわめく食堂の中心において、そんな『威』をまともに喰らい、へたりと椅子に座り込む彼女にバクシンオーは淡々と語りかけた。

「無理だとか無駄だとか、それこそ無謀であるとか、そういった類の言葉はもう聞き飽きましたし、私には関係ありません。何故ならば私が

諦めなければ無理などではないからです。私が歩みを止めねば無駄などではない。私が私である限り、無謀などなんの問題にもならない。道とは、栄光のバクシンロードとは自ら切り開くものなのです」桜色の瞳が見たことの無い強さで輝き、真っ直ぐにこちらを射抜く。

声が出なかった。何も言えなかった。

それほどまでにサクラバクシンオーの言は重く、そして厳かなものだった。

バクシンオーはよく、大真面目にこういつては周囲に笑われていた。『私が目指すは最強のウマ娘！全ての距離を、ターフを、文字通りバクシンしてみせましょう！全てにおいて最強の称号を勝ち取るまで止まらない、古今比類なき学級委員長！ゆえに我が名はサクラバクシンオーなのです!!』

(ああ……ああ……!!)

間違えていた。彼女の名は、バクシンオーという名は。

飾りでも見掛け倒しでも、そして最強ステイヤーの称号ですらない。

絶対に止まることの無い、紛うことなき王者の誇り。

それをそのまま言い表した、王の御名だ。

「おや、皆さん食事中にどうされました？食事は美味しく感謝しながら頂いてこそ！明日の私の活躍が気になりすぎるのは分かりますが、食事を疎かにするのは頂けませんね！その点このサクラバクシンオー、お米の一粒一粒に感謝を捧げながらよく噛んで——」

「委員長っ！」

「はいっ、学級委員長です!!」

気が付けば彼女は立ち上がり、バクシンオーの両手を強く握り締めていた。突然手を握られた当の本人はいつも通りの様子だが、それでも溢れ出す言葉が止まらなかった。

「明日絶対、絶対応援しに行くから……！だから……だから勝ってね！優勝してね！サクラバクシンオー!!」

「勿論ですとも！私が走れば勝利は間違いなし！何故ならば私、学級

委員長ですの!!」

バクシンあるのみ、はーっはっは、と気炎をあげるバクシンオーを笑う者など誰もいない。どころか場の全員が口々に彼女を称える。

「いよっ、流石私達の委員長!」

「いつものバクシン期待してるから!」

「優勝の垂れ幕作つとくから、無駄にしたらタダじゃおかないかね!」

「はーっはっはっは!!ご安心下さい!皆さんの歓喜の委員長コールを中山の芝に響かせてご覧にいれましょう!はーっはっは!!そうと決まれば明日の為に質の高い睡眠を取らねば!では皆さん、また明日!バクシンバクシン!!」

食器を持って嵐のように去っていく背中を見送りながら、委員長コールは暫く鳴り止むことはなかった。

誰もが諦め、哀れとすら思われる戦いに敢然と挑むバクシンオーの気概は人々の心に火を付けた。

皇帝、帝王：絶対なる強者に並び立つたその様は、背を見せて人を導く王の姿に他ならない。

適正も才能も評判も、全てをぶち破り走り抜いた『驀進王』。非常識にして純然たる王、サクラバクシンオーここにあり。

トレーナー「うまぴよいしてえ……」 ナイスネイチヤ「?!?!」

ネイチヤ「おーけーおーけー、一旦落ち着こアタシ。まさかあのドの付く真面目一辺倒のトレーナーさんがそんなこと言うわきやありませんや。こりやちよつと疲れが溜まって幻聴でも聞いたオチですね!いやーURAを前にネイチヤさん一生の不覚!気合いを入れ直さないと……」

トレーナー「いや、そんな弱気でどうする。うまぴよいしたいじゃない、うまぴよいするんだ……!そうだ、俺は絶対にうまぴよいする!!」
ネイチヤ「いや思い切りイ!!!」

トレーナー「お、ネイチヤ来たのか。おいつすー」

ネイチヤ「おいつすー、じゃないよトレーナーさん!ちよ、なにさっきの!その……う、うまぴよいしたいとか!!」

トレーナー「なんだ、聞かれてたのか」

ネイチヤ「聞かれてたのかって、それだけ!?!いやいやいや大問題だからね!?!こんなん学園に知れたらトレーナーさんのクビー発で飛ぶ案件だからね!?!」

トレーナー「うまぴよい(伝説)がそんなに大問題か!?!」

ネイチヤ「そりやうまぴよい(隠語)は大問題でしょうよ!!」

トレーナー「し、知らなかった……うまぴよいってそんなデリケートなものだったのか……」

ネイチヤ「当たり前でしょ!だ、だって、その……オンナノコの夢、と言いますか……いや別にアタシがそんな夢見てる訳じゃないけどね!?!一般的!一般的な話!やっぱり人生を左右するモンじゃん!?!」

トレーナー(たしかにURA優勝という栄冠はその後のレース人生にも大きく作用する……。その距離が、バ場が最も得意な優勝中の優勝という証明にもなる。人生を左右するというのも過言じゃないか。確かに気軽に言葉に出すと雰囲気ガピリピリしてしまうかもしれない)

ネイチヤ「今どきのコは…まあ…遊びというか…経験のひとつと
いうか…そういう風に捉える子もいるけど…」

トレーナー「なっ?!?う、うまびよいが遊び?!?」

ネイチヤ「ちよーっ!!そんな大声でうまびよいとか言うなっ!!
ここがトレーナー室とは言え外に聞こえるでしょーが!!」

トレーナー「す、すまん…。だけど本当か?うまびよいが遊びは流
石に失礼な考方だろう。共に過ごしてきた時間、絆、努力の結晶じゃ
ないか」

ネイチヤ(う……これカツコイイと思っちゃうアタシってやつぱ
ちヨロいのかな…)

トレーナー「少なくとも俺は、ネイチヤとのうまびよいをそんな軽
んじてはいない?!?」

ネイチヤ「?!?」

トレーナー「?!?そんな驚くことないだろう。ここまで3年間二人三脚
で頑張ってきたんだ。俺は何よりも、誰よりもネイチヤとのうまびよ
いを望んでいる自信がある!」

ネイチヤ「えっ、はっ、えっ?!?な、うま、はあっ?!?」

ネイチヤ(待った待った待った待った待った!え?!?嘘でしょこの流
れで?!ネイチヤさん大勝利?!恋の重賞1着入賞!?)

トレーナー「何そんな驚いてんだ、ネイチヤだってそうだろう?」

ネイチヤ「うえっ!…いや、それは…いやさあ!フツーか弱い
オトメに言わせます?!トレーナーさん、アタシが年寄り臭すぎて年頃
の女の子ってこと忘れてません!?!」

トレーナー「…ネイチヤ。確かに目標を、夢を声に出して宣言す
るっていうのは勇気がある事だ。それはお前が1番分かっているだろ
う。だがそれでも、いや、お前だからこそ、俺は声に出してはつきり
と言つて欲しい。今のネイチヤには自分の心に打ち勝つ強さが、重圧
を跳ね除ける誇りが備わっている筈だ。お前を1番傍で見てきた俺
が保証する!ネイチヤは強い!人の、そして自分の期待に応えられる
キラキラしたウマ娘だ!」

ネイチヤ「わ、分かった、分かったから!ああもうこの人はなんで

こんな小っ恥ずかしい台詞がポンポンと出てくるかなあ……！」

トレーナー「誰にでもこんなこと言えない、相手がネイチャだからだ。小っ恥ずかしいことを言っても、斜に構えていても、ネイチャはちやんとそれを受け止めて自分の糧に出来る子だつて分かっているからだ」

ネイチャ「だああああ!!!だからそういうとこだつてえええ…!!分かった、分かりました私の負け!いい、言うから、1回だけ、絶対にもう言い直したりしないから!……しつかり、聞いててクダサイ……」

トレーナー「ああ。一言一句、聞き届ける」

ネイチャ(ずるいよお……こんな勝てるわけない……はあ、先に惚れた私の負けか……)

ネイチャ「わ、私、ナイスネイチャは!」

トレーナー「おう!」

ネイチャ「とととととつ、トレーナーさんとP!!うまぴよ……」

あああああああやっぱ無理いいいいいい!!!」

トレーナー「ちよつ、ネイチャ!どこ行くんだ!!!よつと待て!」

ネイチャ「トレーナーさんのばかあああ!!!」

トレーナー「待つてくれネイチャ!俺は本気だ!本気でお前とうまぴよいしたくて、お前の意思を確認したいだけなんだ!!待つてくれネイチャ!!!」

ネイチャ「大声でそんなこと喚くなあああ
!!!!!!!」

マーベラスサンデー「ネイチヤのトレーナーさんってとっつても情熱的でマーベラスなのね！皆顔真っ赤にして、素敵だって言ってたよ！」

ネイチヤ「ああああ誰かアタシを殺してええええええ……」